平家物語と『吉記』をまるで、
依拠関係から
平家物語を見る

桜本晋作

平家物語と『吉記』との関係について平田俊次氏は、大著「平家物語の批判的研究」の第五章「平家物語と吉記との関係」付、玉葉および山槐記との関係の再検討を、平家物語の原形本の史実の復原と吉記で、'

第一章、『吉記』と共通する編年記は、吉記に基づいて書かれている。'  "吉記"は「平家の成立に大きな影響をもっている。第六、延慶本、長門本、盛記、三本には共通した「吉記」による増補記事が多くあり、それには編年の体例に合致したと、全く合致せずに挿入的なものがある。なお、延慶本、盛記を一本のみに共通した「吉記」による増補記事もある。'  "吉記"は「平家物語の骨格をなしている編年記事の基礎となっている。'

第二章、「平家の成立に大きな影響をもっている。'  "吉記"は「平家の成立に大きな影響をもっている。'

第三章、「吉記」は「平家の成立に大きな影響をもっている。'  "吉記"は「平家の成立に大きな影響をもっている。'

第四章、平家物語の原形本の史実の復原と吉記で、'

第五章、「吉記」は「平家の成立に大きな影響をもっている。'  "吉記"は「平家の成立に大きな影響をもっている。'

第六章、延慶本、四部本はそれぞれ古文をもっとも多く存しているものであるとして、原形本ではない。'  "吉記"は「平家の成立に大きな影響をもっている。'

第七章、吉記に関する記事、神社、仏閣、祈祷などに関する記事、上皇や天皇に関する記事、その他の記事に分け、その傾向をも合わないことにした。吉記については、玉葉の著者の内、武久堅氏、平家物語成立過程考の第三編「初論・平家物語の成立」を、主に参照した。"平家物語」諸本では、延慶本・四部合戦本と屋代本・覚本を中心にとすることにした。'  "吉記"は「平家の成立に大きな影響をもっている。'

第八章、四部本は本文の省略が存するとして、編年記事についてはきわめて原形性を多く存し、その史実あるいは表現に「吉記」と吻合するものがあり、平家の原形、あるいは古文性を考え上でもっと重要なである。'  "吉記"は「平家の成立に大きな影響をもっている。'

第九章、「吉記」は「平家の成立に大きな影響をもっている。'  "吉記"は「平家の成立に大きな影響をもっている。'

第十章、「吉記」は「平家の成立に大きな影響をもっている。'  "吉記"は「平家の成立に大きな影響をもっている。'

第十一章、「吉記」は「平家の成立に大きな影響をもっている。'  "吉記"は「平家の成立に大きな影響をもっている。'

第十二章、「吉記」は「平家の成立に大きな影響をもっている。'  "吉記"は「平家の成立に大きな影響をもっている。'

第十三章、「吉記」は「平家の成立に大きな影響をもっている。'  "吉記"は「平家の成立に大きな影響をもっている。'

第十四章、「吉記」は「平家の成立に大きな影響をもっている。'  "吉記"は「平家の成立に大きな影響をもっている。'

第十五章、「吉記」は「平家の成立に大きな影響をもっている。'  "吉記"は「平家の成立に大きな影響をもっている。'

第十六章、「吉記」は「平家の成立に大きな影響をもっている。'  "吉記"は「平家の成立に大きな影響をもっている。'

第十七章、「吉記」は「平家の成立に大きな影響をもっている。'  "吉記"は「平家の成立に大きな影響をもっている。'

第十八章、「吉記」は「平家の成立に大きな影響をもっている。'  "吉記"は「平家の成立に大きな影響をもっている。'

第十九章、「吉記」は「平家の成立に大きな影響をもっている。'  "吉記"は「平家の成立に大きな影響をもっている。'

第二十章、「吉記」は「平家の成立に大きな影響をもっている。'  "吉記"は「平家の成立に大きな影響をもっている。'

第二十一章、「吉記」は「平家の成立に大きな影響をもっている。'  "吉記"は「平家の成立に大きな影響をもっている。'

第二十二章、「吉記」は「平家の成立に大きな影響をもっている。'  "吉記"は「平家の成立に大きな影響をもっている。'

第二十三章、「吉記」は「平家の成立に大きな影響をもっている。'  "吉記"は「平家の成立に大きな影響をもっている。'

第二十四章、「吉記」は「平家の成立に大きな影響をもっている。'  "吉記"は「平家の成立に大きな影響をもっている。'

第二十五章、「吉記」は「平家の成立に大きな影響をもっている。'  "吉記"は「平家の成立に大きな影響をもっている。'

第二十六章、「吉記」は「平家の成立に大きな影響をもっている。'  "吉記"は「平家の成立に大きな影響をもっている。'

第二十七章、「吉記」は「平家の成立に大きな影響をもっている。'  "吉記"は「平家の成立に大きな影響をもっている。'

第二十八章、「吉記」は「平家の成立に大きな影響をもっている。'  "吉記"は「平家の成立に大きな影響をもっている。'

第二十九章、「吉記」は「平家の成立に大きな影響をもっている。'  "吉記"は「平家の成立に大きな影響をもっている。'

第三十章、「吉記」は「平家の成立に大きな影響をもっている。'  "吉記"は「平家の成立に大きな影響をもっている。'
新参の平戦争時期の経緯

1. 北陸道西征の歴史
2. 四部合戦状の詳細
3. 長門が四部合戦状に記載された背景
4. 吉行家の備忘録に関する説明
三

3 筑後司重の報告

延慶本は、それぞれに「吉記」に近い表現が見られる。しかし、「平家物語」読本と同じに、物語化を狙って、それぞれ工夫しているとも言えそうだ。

4 肥後守貞能の上洛

「吉記」六月十八日条の貞能が千余騎の軍兵を率いて上洛したことも、平田氏の指摘のように「平家物語」に利用されていると見える。先ず、その日付であらが、四部合戦状本・延慶本・長門本・源平盛衰記では一月後、七月十八日になされている。延慶本は、前項3と共に日を遅れて操作されたものと見える。貞能の軍勢の数で一致するものはない。『吉記』によれば、日ごろは数千斛という風聞であったが、実際は僅か千余騎であったそうだ。そのような口吻が、延慶本・長門本・南都本の「吉記」まで伸びている。千騎二足ザリゲキ（延慶本）にはあろう。四部合戦状本には「千騎二足ザリゲキ」の
図

田中、宮本、小山、鈴木、加藤、高橋

色々の図書

田中、宮本、小山、鈴木、加藤、高橋

図

図

田中、宮本、小山、鈴木、加藤、高橋

図

図

田中、宮本、小山、鈴木、加藤、高橋

図

図

田中、宮本、小山、鈴木、加藤、高橋

図

図

田中、宮本、小山、鈴木、加藤、高橋

図

図

田中、宮本、小山、鈴木、加藤、高橋

図

図
源平盛衰記以外の諸本の記事は、屋島の合戦以後湯浅氏の計に身を寄せていたこと、熊野別当との合戦があったことを記していない。頼朝に謀られ切られたという内容である。延慶本は「賢かき命の謀也」という感想を加えている（長門本では「いかなる事やと人かたふき申けり」と逆の表現になっているが、四部合戦状本・屋代本・覚本などにはこのような評ではない）。

「神社・仏閣・祈願などに関する記事

1 興福寺造始

延慶本・長門本にある、治承元年六月二十日の「山階寺・金堂常造徳」。という記事は、平田氏が挙げているように「吉記」同条の「此次、有造

興福寺木作始期」に接ったものであろうか。平田氏は「延慶本の書き入れで、その際以大仏殿造営の記事を削改したものであろう」と考えている。

2 臨時仁王会

「平家物語」四部本にある「四部合戦状本は欠記、養和三年八月九日の大

仁王会」を、武久氏・平田の指摘のように「吉記」に接ったものであるか。平田氏は「十月の詠問の際に決まった」という。「吉記」に接していたものであろうと推定している。又、延慶本・長門本・源平盛衰記にある「朝

九

3 伊勢神宮甲冑奉納

甲冑の奉納使定隆が急死した後の対応が延慶本・長門本・源平盛衰記に

4 頻真の法華経伝読

「平家物語」四部本にある「前壇少僧都顕真、貴賤上下を勘めて、如法に

法華経一冊を、日吉の社に於て読読せしむる事あり」という記事がある。「四部合戦状本」と「吉記」には三月十五日からその「如法転読前、方丈に懸法」が一週間、

『前僧都顕真、井原源覚源護、山門法橋等勤進を、始められた」という表現があるが、此事と前僧都顕真勤進を「吉記」という表現では、以後にも出てくるが、四部合戦状本・屋代本・長門本・源平盛衰記の四月十四日という日付けは、法皇に関する流言を騒動のあった日であること、如法転読と三十七日
延慶本は「吉記」の通りだが、四部合戦状本は七月十七日、長門本も七月二十一日に繰り下げる。主催も「家」通り、抄法も「七仏薬師供養」となっている（南都本も同じ）。祈願後の布施の不平等さを、延慶本、長門本は「アタ」、という言葉で済ましているが、四部合戦状本・源平盛記・南都本は数を示して強調する。一方、騒動について、四部合戦状本・源平盛記・南都本は「奉行は偏頗なりと、兼光を散々に破壊したり」と、奉行が怒り向けて来たのを、延慶本は「偏頗なりと、兼光を散々に破壊したり」と、奉行が怒り向けて来たのを、延慶本は「偏頗なりと、兼光を散々に破壊したり」と、奉行が怒り向けて来たのを、延慶本は「偏頗なりと、兼光を散々に破壊したり」と、奉行が怒り向けて来たのを、延慶本は「偏頗なりと、兼光を散々に破壊したり」と、奉行が怒り向けて来たのを、延慶本は「偏頗なりと、兼光を散々に破壊したり」と、奉行が怒り向けて来たのを、延慶本は「偏頗なりと、兼光を散々に破壊したり」と、奉行が怒り向けて来たのを、延慶本は「偏頗なりと、兼光を散々に破壊したり」と、奉行が怒り向けて来たのを、延慶本は「偏頗なりと、兼光を散々に破壊したり」と、奉行が怒り向けて来たのを、延慶本は「偏頗なりと、兼光を散々に破壊したり」と、奉行が怒り向けて来たのを、延慶本は「偏頗なりと、兼光を散々に破壊したり」と、奉行が怒り向けて来たのを、延慶本は「偏頗なりと、兼光を散々に破壊したり」と、奉行が怒り向けて来たのを、延慶本は「偏頗なりと、兼光を散々に破壊したり」と、奉行が怒り向けて来たのを、延慶本は「偏頗なりと、兼光を散々に破壊したり」と、奉行が怒り向けて来たのを、延慶本は「偏頗なりと、兼光を散々に破壊したり」と、奉行が怒り向けて来たのを、延慶本は「偏頗なりと、兼光を散々に破壊したり」と、奉行が怒り向けて来たのを、延慶本は「偏頗なりと、兼光を散々に破壊したり」と、奉行が怒り向けて来たのを、延慶本は「偏頗なりと、兼光を散々に破壊したり」と、奉行が怒り向けて来たのを、延慶本は「偏頗なりと、兼光を散々に破壊したり」と、奉行が怒り向けて来たのを、延慶本は「偏頗なりと、兼光を散々に破壊したり」と、奉行が怒り向けて来たのを、延慶本は「偏頗なりと、兼光を散々に破壊したり」と、奉行が怒り向けて来たのを、延慶本は「偏頗なりと、兼光を散々に破壊したり」と、奉行が怒り向けて来たのを、延慶本は「偏頗なりと、兼光を散々に破壊したり」と、奉行が怒り向けて来たのを、延慶本は「偏頗なりと、兼光を散々に破壊したり」と、奉行が怒り向けて来たのを、延慶本は「偏頗なりと、兼光を散々に破壊したり」と、奉行が怒り向けて来たのを、延慶本は「偏頗なりと、兼光を散々に破壊したり」と、奉行が怒り向けて来たのを、延慶本は「偏頗なりと、兼光を散々に破壊したり」と、奉行が怒り向けて来たのを、延慶本は「偏頗なりと、兼光を散々に破壊したり」と、奉行が怒り向けて来たのを、延慶本は「偏頗なりと、兼光を散々に破壊したり」と、奉行が怒り向けて来たのを、延慶本は「偏頗なりと、兼光を散々に破壊したり」と、奉行が怒り向けて来たのを、延慶本は「偏頗なりと、兼光を散々に破壊したり」と、奉行が怒り向けて来たのを、延慶本は「偏頗なりと、兼光を散々に破壊したり」と、奉行が怒り向けて来たのを、延慶本は「偏頗なりと、兼光を散々に破壊したり」と、奉行が怒り向けて来たのを、延慶本は「偏頗なりと、兼光を散々に破壊したり」と、奉行が怒り向けて来たのを、延慶本は「偏頗なりと、兼光を散々に破壊したり」と、奉行が怒り向けて来たのを、延慶本は「偏頗なりと、兼光を散々に破壊したり」と、奉行が怒り向けて来たのを、延慶本は「偏頗なりと、兼光を散々に破壊たり
延慶本・長門本・源平盛衰記に記されている。延慶本は元和年行わられたの
た編年記事である。延慶本・長門本・源平盛衰記にある鳥羽天皇の例に
との表現である。四部合戦状本・延慶本・長門本にある勝名の敷き直しは、
本・源平盛衰記・南都本が「北面、衛府両三三人」といった表現であり、
具体的に人名二人を挙げるのは延慶本・長門本だけである（但し、延
安德天皇の都落ち

「吉記」の通じる表現である。供奉者を「吉記」は「右馬頭賢時朝臣、大夫尉

平家物語諸本の描く鞍馬から横川に至る東門、円屋敷という行路は

「吉記」の通じる表現である。供奉者を「吉記」は「右馬頭賢時朝臣、大夫尉

平家物語諸本の描く鞍馬から横川に至る東門、円屋敷という行路は

「吉記」の通じる表現である。供奉者を「吉記」は「右馬頭賢時朝臣、大夫尉

平家物語諸本の描く鞍馬から横川に至る東門、円屋敷という行路は

「吉記」の通じる表現である。供奉者を「吉記」は「右馬頭賢時朝臣、大夫尉

平家物語諸本の描く鞍馬から横川に至る東門、円屋敷という行路は

「吉記」の通じる表現である。供奉者を「吉記」は「右馬頭賢時朝臣、大夫尉

平家物語諸本の描く鞍馬から横川に至る東門、円屋敷という行路は

「吉記」の通じる表現である。供奉者を「吉記」は「右馬頭賢時朝臣、大夫尉
【家名物語】諸本にあるが、【吉記】に相当近い。【吉記】によれば、内侍覚一本は臨時除目日にしている。遷御では、毎年五詫場で起こる為に行われたもので、非当道系諸本はこれに係わり合わないとしている。延慶本、長門本は一貫として、延慶本の為しと言えようか。

6 京都大地震
元禄二年七月九日の大震災の時の後白河法皇の動いを四部合戦状本に書かれたもので、延慶本、長門本は、これに係わり合わないとしている。延慶本の為しと言えようか。延慶本、長門本は、神社に関係し、六波羅へと記している。これは、平田氏が挙げているように、【吉記】に掲げたものと見て宜かろう。

他の記事
1 拝政の都落ち
四部合戦状本を除く【家名物語】諸本が描く政、近衛殿基通の動いの経緯で【吉記】が踏まえられているという平田氏の指摘も、従って宜かろう。
し、延慶本の「人ノ知不知、拱政殿八吉野ノへトソヲアヘックレル」とするのは、南都本の「高則知ヘニテ吉野ノへヘッロラゼ給ヒケル」と何らかの関係であろう。又「吉記」で共通の離脱を止めようとしたが聞き入れられず、遂に平

家に同行した内藤諸基は、「平家物語」諸本では平大納言時忠と衣冠で

供奉したことになっている。「平家物語」編者等の虚構ということにな

うか（場面の時間が異なるという捉え方）も出来よう。

2本原義仲による公卿、殿上の解官

延慶本・長門本・源平盛衰記・南都本の解官の日付は、平田氏の指摘の通り「吉記」に読むと見えておくべき「屋代本は一日前の二十七日。覚一のの二十二日は、記事の最終化によるものと見られる。源平実録

は、日付などを含む一文が脱落したのではなくか、と考える（四部合

戦状本は欠巻）。

先ず、筆者が依拝の可能性を認めつつ探り上げた箇所がどのような場面で

あるか、分類の結果を縦にして、

右の考察の結果を縦にして置きたい。

合戦や軍団等に関する記事

平氏や源氏に関する記事

平氏や源氏に関する記事

合戦や軍団等に関する記事

義仲、行家の参内、義経の西海発行はこの項にも加えた。
四部合戦状本と延慶本は、「吉記」に依拠したかと見られるところが
ば同数で、屋代本・覚一本の倍程の数である。

四部合戦状本は、新中納言資盛が近江国に向かうと、かかるところから、
合戦を機能した安德天皇を奉还するように命じるまでの編年記事の日時を、
吉記に密する決っているようである。これに対して、延慶本には、内
合戦など、細部の問題を京の守護分指、法性寺殿合戦における光长父子、
合戦など、詳細な実状の記述において「吉記」を参照しているかと見られ
る日時に一致するのが目につく。

猶、日時についても、日だけでなく月をずらしているところもある。
これは、四部合戦状本にも屋代本にも認められたが、最も多くは延
慶本である。これは、延慶本が「吉記」に依拠しているかと見られ
る日時に一致するのが目につく。

猶、日時に一致している。日だけを生かして月をずらしているところもある。
これは、四部合戦状本にも屋代本にも認められたが、最多も多いのは延
慶本である。これは、延慶本が「吉記」に依拠しているかと見られ
る日時に一致するのが目につく。

他の依拠、編集の具合を採るという程度の作業を通して浮かび上がっ
て来たのは、「平家物語」の物語性の姿态である。「吉記」への依拠が認め
られるということ、その一部が原史の接近は全くに止まる。

平家物語が「吉記」を参照して本文が出来上がった行ることも、平
家物語が「吉記」を参照して本文が出来上がった行うことには、明らかで
ある。平家物語が、史実源氏史の作成に向けているかと見られ、それである。平
家物語が、史実源氏史の作成に向けているかと見られ、それである。平
家物語が、史実源氏史の作成に向けているかと見られ、それである。平
家物語が、史実源氏史の作成に向けているかと見られ、それである。平
家物語が、史実源氏史の作成に向けているかと見られ、それである。平
家物語が、史実源氏史の作成に向けているかと見られ、それである。平
家物語が、史実源氏史の作成に向けているかと見られ、それである。平
家物語が、史実源氏史の作成に向けているかと見られ、それである。平
家物語が、史実源氏史の作成に向けているかと見られ、それである。平
家物語が、史実源氏史の作成に向けているかと見られ、それである。平
家物語が、史実源氏史の作成に向けているかと見られ、それである。平
家物語が、史実源氏史の作成に向けているかと見られ、それである。平
家物語が、史実源氏史の作成に向けているかと見られ、それである。平
家物語が、史実源氏史の作成に向けているかと見られ、それである。平
家物語が、史実源氏史の作成に向けているかと見られ、それである。平
家物語が、史実源氏史の作成に向けているかと見られ、それである。平
家物語が、史実源氏史の作成に向けているかと見られ、それである。平
家物語が、史実源氏史の作成に向けているかと見られ、それである。平
家物語が、史実源氏史の作成に向けているかと見られ、それである。平
家物語が、史実源氏史の作成に向けているかと見られ、それである。平
家物語が、史実源氏史の作成に向けているかと見られ、それである。平
家物語が、史実源氏史の作成に向けているかと見られ、それである。平
家物語が、史実源氏史の作成に向けているかと見られ、それである。平
家物語が、史実源氏史の作成に向けているかと見られ、それである。平
家物語が、史実源氏史の作成に向けているかと見られ、それである。平
家物語が、史実源氏史の作成に向けているかと見られ、それである。平
家物語が、史実源氏史の作成に向けているかと見られ、それである。平
家物語が、史実源氏史の作成に向けているかと見られ、それである。平
家物語が、史実源氏史の作成に向けているかと見られ、それである。平
家物語が、史実源氏史の作成に向けているかと見られ、それである。平
家物語が、史実源氏史の作成に向けているかと見られ、それである。平
家物語が、史実源氏史の作成に向けているかと見られ、それである。平
家物語が、史実源氏史の作成に向けているかと見られ、それである。平
家物語が、史実源氏史の作成に向けているかと見られ、それである。平
家物語が、史実源氏史の作成に向けているかと見られ、それである。平
家物語が、史実源氏史の作成に向けているかと見られ、それである。平
家物語が、史実源氏史の作成に向けているかと見られる。
（注一）四部合戦状を含む諸本の場合は、四部合戦状の本文を注八に従って示した。源平際記の本文で示した。四部合戦状は、福田豊彦、服部幸造氏注釈。

（注二）源平際記の本文で示した。源平際記は、福田豊彦、服部幸造氏注釈。

（注三）平成三年正月の訓読本文によった。平成十五年五月十六日受理。